

人生についての教訓



ダーナ・ウェルトン

駐札幌米国総領事

米国南部ノースカロライナ州生まれ。ニューヨーク州の田園地帯で育った。ロータリークラブ交換留学生として1年間熊本市に滞在。エール大学で東アジア語学文学を専攻、学士号取得、その後、ミシガン大学アンアーパー校大学院で美術史を学び、プリンストン大学から芸術と考古学分野で修士号取得。フーバーNSK(株)、日本精工(株)を経て、ニューヨーク・メトロポリタン美術館と全米芸術協会の学芸員、その後15年以上にわたり米国外交官として勤務。前任地はインドネシアの在ジャカルタ米国大使館で文化担当官として勤務。日本では、在東京米国大使館や福岡と名古屋の各領事館で勤務した経験がある。

先日、新しく北大に入ってきた留学生たちに話をする機会がありました。話をしながら、私自身の多くの思い出がよみがえってきました。

今から35年前、私は交換留学生で日本に来ていました。もし、あのとき、外国で生活するという体験をしなかったならば、多分、外交官にはなっていなかったと思います。

私は、自分自身の体験を幾つか紹介しました。留学生たちは、学問を身につけるために日本に、北大に来たと思っているのですが、留学して学ぶ最も大切なことは、いかに生きていくべきかということなのです。この経験のうえに、一人前の人間に成長していくのです。そしてこのことこそ、何も知らない16歳の高校生だった私が、故郷から遠く離れた熊本で、見るもの、聞くもの、全く違う環境の中で過ごした1年間に得たものなのです。

私の住んでいたニューヨーク州北部から見ると、日本は同じ地球上に存在こそしていても、はるかに遠いところにある国でした。そのころの日本とアメリカは、距離的にも時間的にも今よりもはるかに離れていました。コンピューターも、Eメールも、テレフォンカードも、Skype^{※1}もなかったのです。国際電話料金は本当に高く、家に電話できるのはクリスマスだけでした。ですから、私はひたすら手紙を書きました。毎週、毎週、私は青色のエアグラム（折りたたむと簡易封筒になる航空便専用便箋）に手紙を書きました。私はこのエアグラムがいまだにお気に入りです。その中に収まるようにとても小さな文字でピッシリと書き込んだものです。日本での生活がどんなものなのか、こと細かく家族に伝えたかったのです。多分、私の家族には見当もつかなかったのだと思います。彼らが行ったことのある外国といえば、カナダだけだったからです。それでも、少なくとも大変なところで何とか私が生きているということは伝わっていたと思いますし、家族にとってはそれを知りえることが最も重要なことでした。

※1 Skype (スカイプ)

ルクセンブルクのスカイプ・テクノロジー (Skype Technologies) 社が2003年に開発したインターネットプロトコルを使った電話システム、およびソフトウェアの名称。

実のところ、私は、自分の家族が本当に私の帰国を待ち望んでいたかについて疑っていました。というのは、私が熊本にいた間、私の家から学校に通っていた宮崎市出身の留学生は、私よりも、一緒にいてはるかに楽しいし、チャーミングで、そのうえバレーボールがものすごく上手な女の子でした。1年経って私が帰国すると、みんなちょっとがっかりしたようでした。少なくとも私はそう感じました。私は勉強や作文は得意でしたが、私の学校や家族は、スポーツや音楽に夢中で、学問に重きをおく雰囲気などなかったからです。私は、小さい頃から読書好きでしたし、背も高くはなく、ある意味、アメリカよりはるかに日本向きだったのです。それでも、当時も今も外国人に違いありません。けれども、日本では外国人であり、他と違って良かったのです。そもそも私は「外国人」であり、人々もそのように振る舞うことを私に期待していました。

教訓その1「ありのままの自分を認めなさい。そうすれば、あなたにふさわしい場所が見つかるはずです」

ほとんど日本語が分からない私を受け入れてしまった、気の毒な私のホストファミリーの身になってみて下さい。私が唯一言えたのは、「〇〇はどこですか？」というワンパターンな文型だけでした。お風呂はどこですか？学校はどこですか？お城はどこですか？お弁当はどこですか？ 私たちは、ほとんどの時間を、テーブルの上に開いたまま置かれている辞書を引きながら、英語で筆談をしなければならなかったのです。

ロータリークラブ主催の交換留学生^{※2}のためのオリエンテーションでは、お風呂の入り方、朝は布団を上げること、玄関では靴を脱ぐことなどを教えてくれましたが、誰も朝食に出てくる目玉焼きの食べ方については教えてくれませんでした。どうやって箸で目玉焼きを食べるというのですか？！私のホストファミリーの10歳の男の子は、食卓に着くと、私をこの困った状況から救い出してくれました。私は、横目で彼を

観察しました。彼は、まず黄身から白身を剥がして、白身を食べました。次に、箸を黄身の下に滑り込ませて、一気に口の中に押し込んだのでした。それからハムとキャベツの千切りを食べました。完璧！それ以降、私はこのマサヒロ流をずっと使っています。私は、それを食べ方のプロから学んだのです。

教訓その2「あなたの周りにいる全ての人がやっていることに注意していなさい。耳を澄まし、目を凝らしなさい。彼らから実に多くのことを学べるのです。彼らが、いくつであっても関係ありません。誰でも、あなたにとって有用なことを幾つか知っているものです」

ついに私は日本語を話せるようになりました。まだ若かったですし、幸運なことに、たくさんのことが自然に染み込むように私の頭の中に入ってきました。私は、持っていた教科書で、日本語の文法や文型を勉強しましたし、通っていた高校の書道の先生には、カナや漢字の読み方、書き方を指導していただきました。

先生は授業中、一方で生徒の一人ひとりに個別に指導し、また全員に大きな太筆で水を使って黒板に実際にお手本を書いてみせました（彼の腕力には驚かされました）。その合間に、私のために丁寧に、漢字一字一字に英訳を書いて下さったり、私の持っている本に出ている仮名文字による詩歌の解説をして下さいました。

最初に私が覚えた漢字は、「雲」でした。数年後、プリンストンの大学院のゼミで初めて、その漢字が中国で最も有名な書道家による楷書の写しであることに気がついたのです。どんな具合に文字が成り立っているか、墨の匂いがどんなものか、美しく書き上げるためにいかに集中力と時間を要するかなどの記憶が私の頭の中で一つにまとまり、私自身を歴史と結びつけてくれたのです。中国の書や美術は、決して難解で抽象的なものではなく、日々の中から生まれたものです。そして、遠い昔の熊本の高校で得た見識が、私が修士論文を仕上げるのに大きな支えになり、また、ニュー

※2 ロータリークラブ交換留学生

世界168カ国にクラブを擁する国際ロータリーの青少年交換プログラム。16歳から18歳の高校生を海外のロータリークラブに派遣し、1年間、ごく普通の家庭にホームステイしながら学校に通い、家族、その町の一員として学生生活を過ごす。

ヨーク・メトロポリタン美術館の学芸員として、職を得るきっかけを作ってくれたのでした。

教訓その3「あなたの最良の見識は、思いもかけない人とのつながりや、そのときには見過ごしてしまうようなことから養われる。自分の仕事や勉強に、失敗を恐れず、創造的に取り組みなさい。他人と同じようになどという安易な道を選んではいけません」

私が満足に日本語を話すことができなかつたので、私のクラスメートたちがテストを受けているとき、私をどう扱ったらよいかも問題になりました。時には、私は市の中心にある長い商店街を行ったり来たりして、日本語の練習をすることを認められることもありました。そのときアーケード街で嗅いだほうじ茶の香りが、今でも大好きですし、青果店で、ダンボールの切れ端に手書きのマジックペンで書かれ、小さな籠に刺してある値札を読むことによって、実際、たくさんの日本語を覚えることができました。

「キュウリ3本100円」「天草ミカン1山400円」「モヤシ30円」

いつもモヤシの入っているバケツには、ホースからの水道水が出しっぱなしになっており、辺りに水が溢れ出ていました。商店街は、絵入り辞書より、はるかに役に立つものです。このことが、今でも私が新聞の折り込み広告、とりわけ札幌の地元スーパーの広告が好きな理由だと思っています。もちろん、「ラーメン」は私の最も好きなカタカナです。クラスの悪がきたちは、私を怖がらせようと、「熊本ラーメンがおいしいのは、猫の骨を隠し味に使っているせいだ」と言っていました。

教訓その3.5「結局、男の子はどこでも同じだ」

時には、私はいつもより早く家に帰ることができました。早春の昼下がり、ガラス戸の付いた縁側から漏れてくる陽光を浴びながら、一冊の本を友に、ホストファミリーの飼い猫のピコちゃんと一緒にいると、本当に穏やかな気分になれるのでした。ただし、こたつに入るときは要注意でした。こたつの中はピコちゃんのお気に入りの場所で、うっかり蹴飛ばそうものならば、怒って噛みつくからです。

時間はゆっくり流れ、私はすっかりリラックスして、ほんのささいなことにも喜びを見いだせるようになりました。例えば、庭の梅の木が咲きだしたとか、お昼に胡椒のたくさん入った長崎チャンボンの出前を頼み、出前の人配達するのを眺めることだとかです。バイクの荷台にスプリングの付いたオカモチ^{※3}を取り付けて運んで来るのですが、いつ見ても魅力的で、その創意工夫に脱帽せざるを得ませんでした。

そして、ミステリーツアーというのもありました。実はその多くが、私がよく日本語が分からないことと、私のホストファミリーが英語で十分に説明しきれないために起こるものでした。

例えば、11月のある日、「交換留学生を全員指宿^{※4}に連れて行こうと思います。楽しいよ。砂が熱いんだ」(熱砂だって！それが楽しい？足の裏を火傷するんじゃないの？)実際に、行ってみると、確かに楽しかった。砂は温かくて気持ち良かった。私は、そのときの写真を今でも大切に持っています。九州在住のロータリーの全交換留学生14名がそれぞれの学校の制服をきちんと着て参加しました。しかし、その格好たるや、裸足だったり、背が高い人、低い人、太っている人、やせている人、髪の毛の色も赤、茶、プロンドと、てんでんばらばらで、11月の指宿の「熱砂」に覆われた波打ち際を歩き回ったのでした。

翌12月のある日、「今日は、クラスで校外見学に行きます。幾つかの牧場を見て回ります。」(なぜ？どのクラスなの？どこに行くの？何をしなければならぬの？牛を見に行くの？しばらく牛を見ていないなあ。

※3 オカモチ (岡持ち)
器に入れた料理を持ち運ぶ道具。

※4 指宿 (いぶすき)
鹿児島県薩摩 (さつま) 半島の南東部にある温泉観光都市。



アメリカにはたくさんいたのに。) いまだによく分からないのですが、多分、農家の世帯収入を把握する社会科学の宿題だったのではなかったかと思っています。私のクラスメートたちは、首からクリップボードをぶら下げて歩き回りながら、玄関の引き戸を引いて、誰かいないのか声を掛けていました。とにかく、この日、初めて易しい日本語の敬語、「ごめん下さい」を覚えたのです。この言葉は大変役に立つことが分かりました。

午後4時ごろ、暗くなってきたので、家に帰ろうとみんなでバス停に向かう途中、私は「焼き芋」を知りました。トラックの荷台から新聞紙に包んで渡された実にシンプルなものが、戸惑うばかりだった冬の日の終わりに、どことも分からない場所で食べると、どんなにか癒やされ、おいしかったことでしょう。

翌年の3月、「今回はロータリークラブのバスツアーで、ピクニックに行きます」。目的地に着きましたが、それは、私たちアメリカ人が考えるピクニックではありませんでした。誰一人として、バーベキューの道具を用意してきて、ホットドッグやハンバーガーを焼こうなどとはしません。野球やフリスビーで遊ぶなどという人は一人もいませんし、クーラーボックスに飲み物を用意もしてきません。みんなで、広い開けた丘を、草の中に何かを見つけようとして、スーパーのレ

ジ袋を持って歩き回るので。「ワラビだ！」橋本さんが言いました。(ワラビって何なんだ？足が生えているの？危険なもの？) たまたま、誰かが私に見せてくれました。シダ類の新芽、山菜ですよ。日本は、アメリカとは全く違うのです。私が少し家に帰ると、私のホストファミリーは大変喜びました。次の日の、お味噌汁の具はワラビでした。確かにおいしいのですが、焼き芋ほどではありません。実際、焼き芋ほどおいしいものは他にはありません。

教訓その4「我慢と好奇心は必ず報われる。時間をかければ、世の中には見るものがまだまだ沢山ある。たまたま行った場所、そこがどこであれ、あなたは多くのものを見つけることができる。決して飽きることはないのです。しかし、本当の教訓は、次のようなものです。もし、誰かに一緒に来るように頼まれたら、いつも付き合いなさい。なぜならば、一生記憶に残るような食べ物に巡りあえるかも知れないからです。特にそれが新聞紙に包まれている場合は」

私は学校が好きでしたが、1週間の中で一番の楽しみは、林田先生ご夫妻のご自宅にお茶の稽古に行くことでした。林田先生のお宅は大変古いもので、その広い庭は緩やかに傾斜していて、竹林に覆われ、奥の方に洋風の家屋が新たに建てられていました。私は、門扉を開け、玄関に続く飛び石の上を歩いていくのが大好きでしたし、稽古そのもの、茶道の所作、茶道具をこよなく愛していました。また、午後からお茶を習いに来ている、私より多少年上の若い娘さんたちと会うのも楽しみでした。彼女たちは、結婚準備のためにお茶を習いに来ていたのです。昨年の北海道洞爺湖サミットの際、首脳夫人たちのために茶会が催されることになり、ブッシュ大統領夫人のために私が茶道の解説を書くことになったとき、林田先生のお宅で経験したこと全てが役に立ち、嬉しくなりました。

しかしながら、私にとって最高にためになったのは、お茶の稽古が終わり、稽古で使った竹器、漆器、陶磁器を奇麗に水洗いし、よく乾くように流しに置いた、その後の時間でした。稽古が終わると私たちは奥にある洋風の建物に移り、ソファに腰掛け、紅茶をいただきながら、芸術のこと、日本のこと、それぞれの思い出などを話しました。先生は、私が唯一日本語で「先生」と呼んでいる人ですが、先生がまだ慶応の学生だったころ、SLに乗って東京に行って煤煙で顔が真っ黒になったこと、また、イタリア旅行の話も聴きました。さらに、遠回しにですが、仕事を辞めて熊本に戻った理由や、旗本の次男だったため、長男の住んでいる大きな家の隣の小さな家に住まざるを得なかったことなどもうかがいました。先生は、春には竹の子の掘り方を教えてくれましたし、折りあるごとに私の爪をチェックしていました（今でも私は爪をキッチンと切っています。先生は、爪にとっても神経質だったのです）。夏の間、私が暑さと湿気で参っていると、シャワーを使わせてくれました。

こんな経験があったので、その後大学で夏目漱石の「こころ^{※5}」を読んだとき、私には、「先生」という言葉のニュアンス、地球上のどんな社会も、特に多くの年代層から成っている場合には、その人間関係がいかに複雑であるかについて、私の同級生たちよりは遥かに深く理解できたのだと思います。

疑いもなく私は、林田先生から、多くのかけがえない教えを受けました。中でも、今でも忘れられないのが料理です。ある日、先生は私に「来週は、君が私たちに料理を作ってくれる番だ」とおっしゃいました。それまで、私は、どこでも、誰にも、料理を作ったことなどありませんでした。私にできるのだろうかと不安になったのです。しかし、先生の頭の中には、不安とか、ためらいというようなことは一切ありません。どうしても料理をしなければなりません。先生は、私を市場に連れて行き、材料を仕入れ、台所に戻って、私の分を含めて3人前の昼食を私に作れと言うの

です。一体全体、私は何を作ればよいのでしょうか。1973年の熊本には、私の知っているアメリカ料理とほんの少しでも似ているものは、何ひとつとしてなかったのですから。幸いにも、その水曜日の「ジャパントイムズ」に、魚のスープの簡単なレシピが掲載されていました。バター、トマト、鱈、白ワイン、パセリが材料です。これなら何とかできそうでした。勉強のため長時間にわたり商店街歩きをさせられたおかげで、どこで何を売っているか、すっかり身につけていたのです。材料を買った後、フランスパンを買い、サラダを作りました。あまり上手には作れませんでした。先生に恩返しできたのだと思いました。先生が教えてくれたことは、うまくやるのが目的ではなく、私が自らやることだったのです。

私は今でも友人に料理を作ることが大好きです。

教訓その5（＝最後の教訓）「あなたが他人のために何かをやる、そのことだけで十分なのです」

※5 こころ

夏目漱石の後期3部作（彼岸過迄、行人、こころ）の終曲。先生を語る学生と先生の告白により構成されている。